

令和2年1月報 【令和2年1月1日(水)～1月31日(金)】

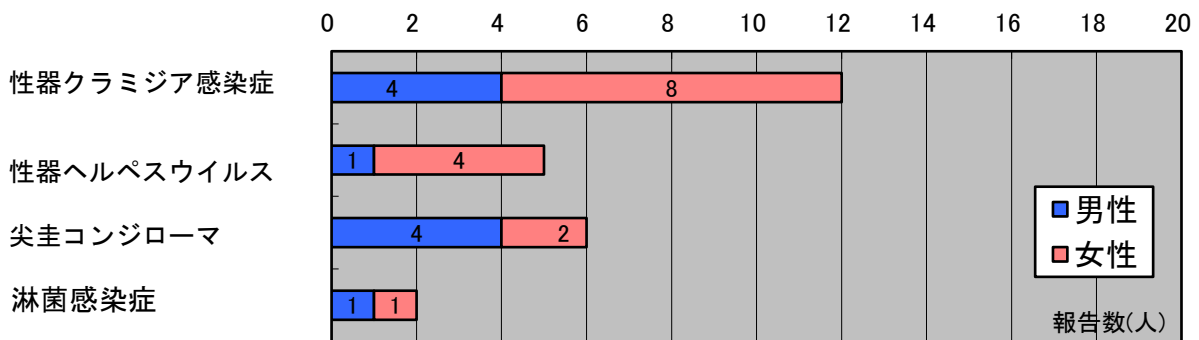
鹿児島市感染症情報

発行元：鹿児島市保健所

ホームページ <http://www.city.kagoshima.lg.jp> >健康・福祉>健康・医療>流行疾患、感染症>感染症の発生状況

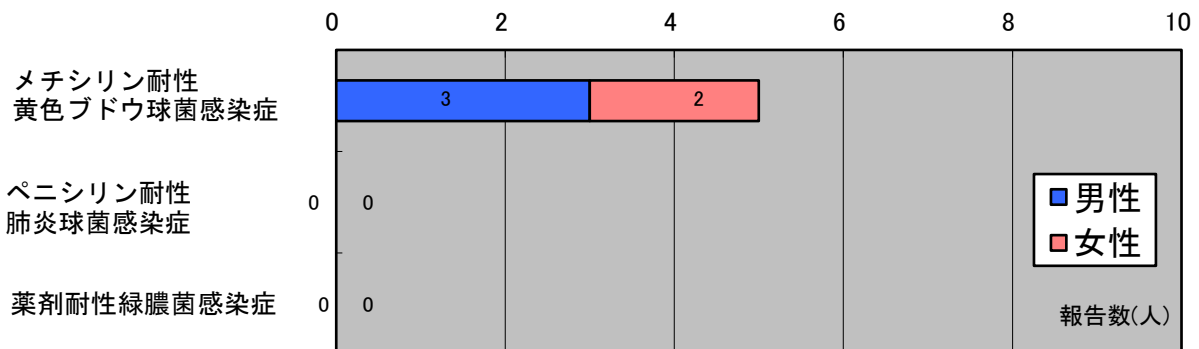
● 定点医療機関における性感染症の報告状況

期間中の患者報告総数は、前月より9人少ない25人(男性10人・女性15人)でした。
報告数が最も多かったのは、性器クラミジア感染症(男性4人・女性8人)でした。



● 定点医療機関における薬剤耐性菌感染症の報告状況

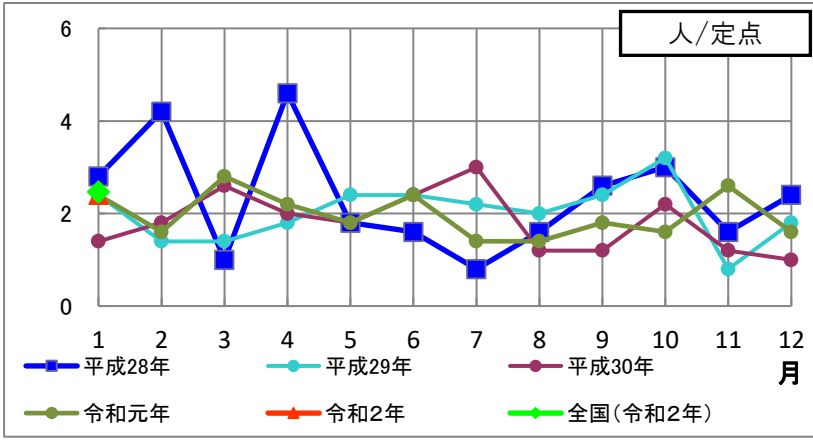
期間中の患者報告総数は、前月と同じ5人(男性3人、女性2人)でした。
報告数はメチシリン耐性黄色ブドウ球菌感染症のみでした。
年齢別の内訳は、5ページを参照してください。



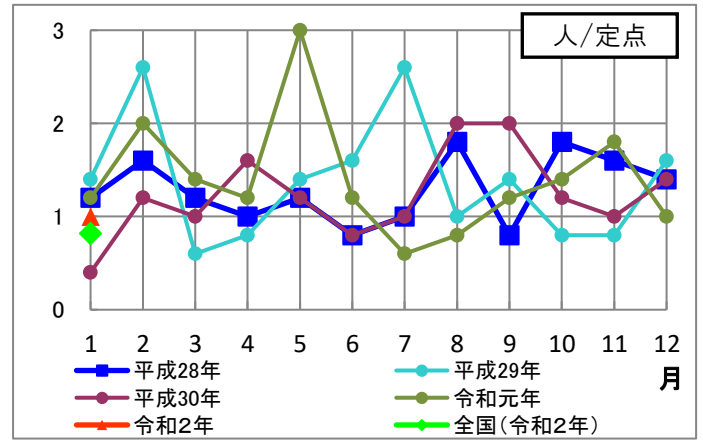
●性感染症の報告状況の推移 (比較)

縦軸の値⇒報告数÷報告義務がある医療機関数
横軸の値⇒報告を受けた月

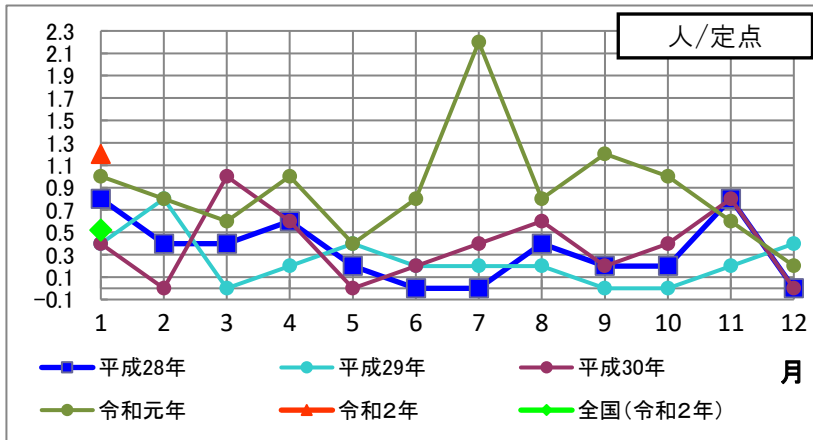
【性器クラミジア感染症】



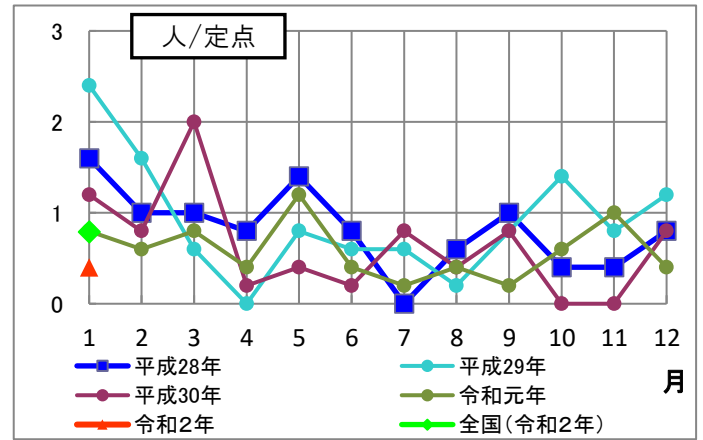
【性器ヘルペスウイルス感染症】



【尖圭コンジローマ】

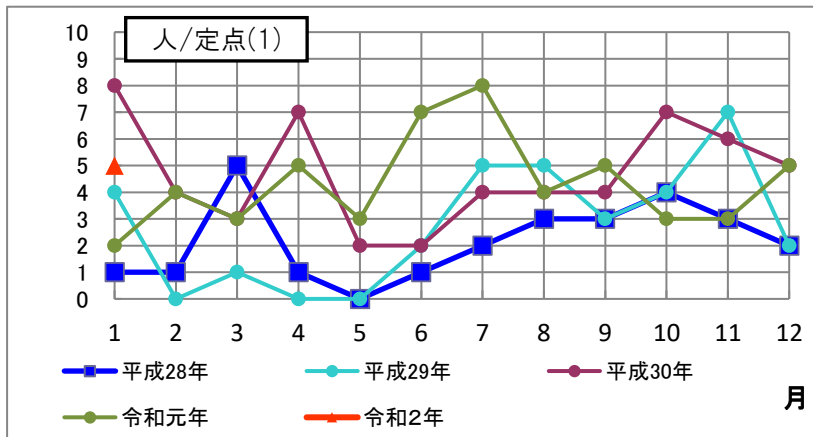


【淋菌感染症】

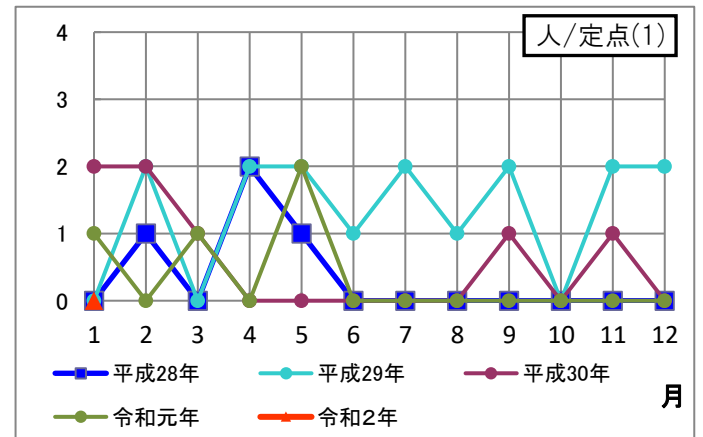


●薬剤耐性菌感染症の報告状況の推移 (比較)

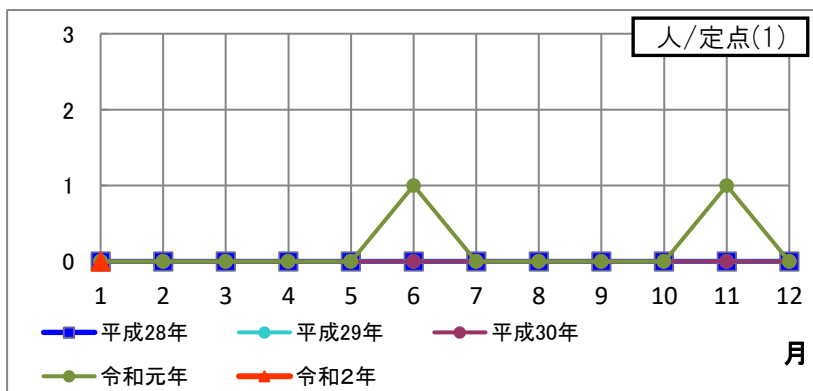
【メチシリン耐性黄色ブドウ球菌感染症】



【ペニシリン耐性肺炎球菌感染症】



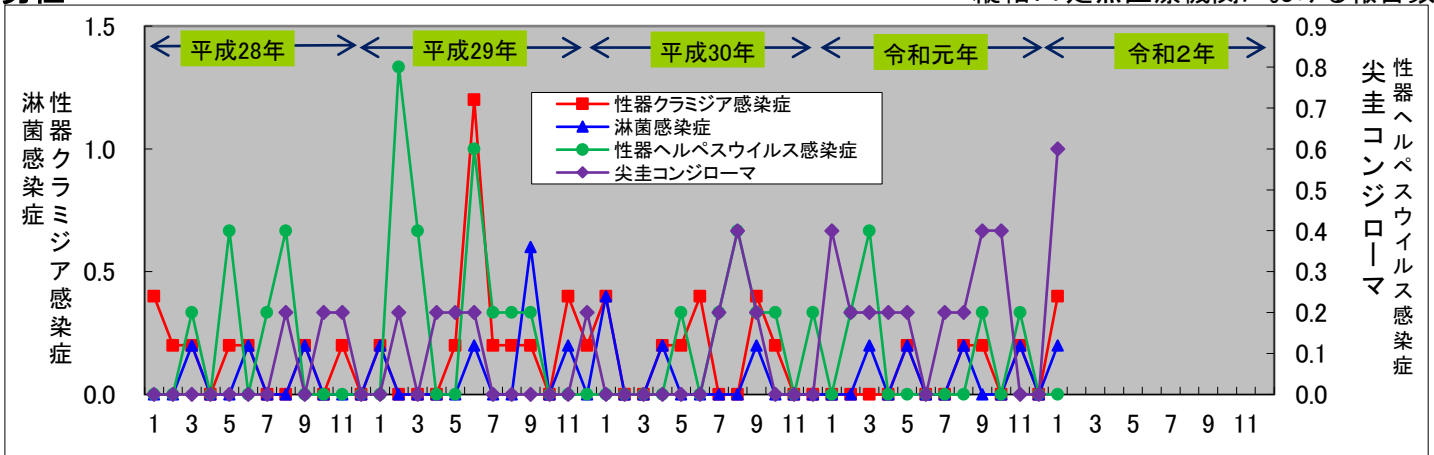
【薬剤耐性緑膿菌感染症】



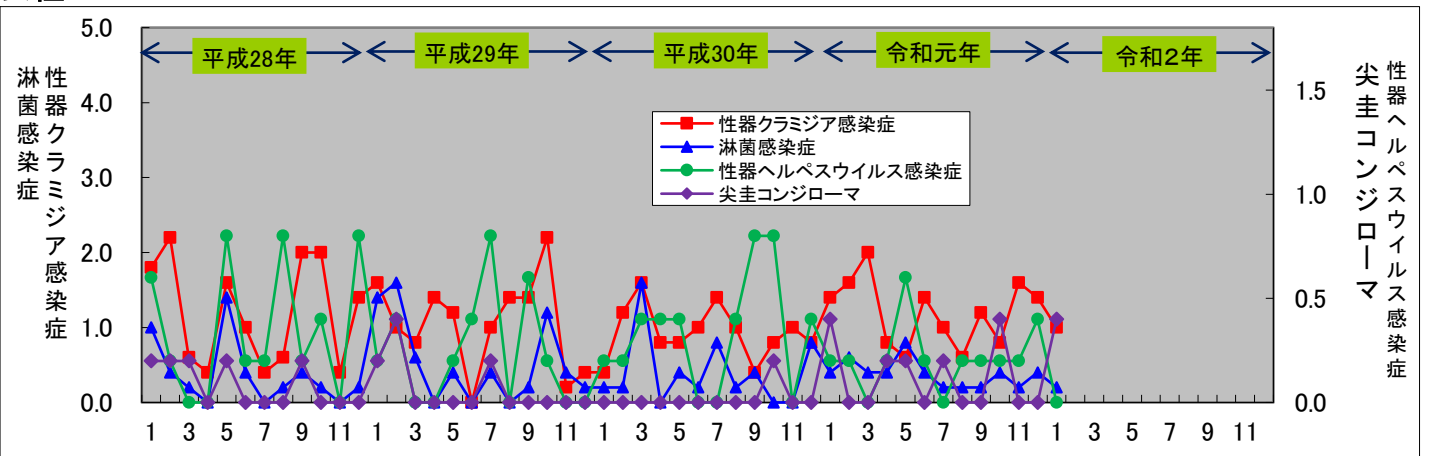
●若年層（15歳～29歳）における性感染症の年別・月別の推移

男性

縦軸：1定点医療機関における報告数

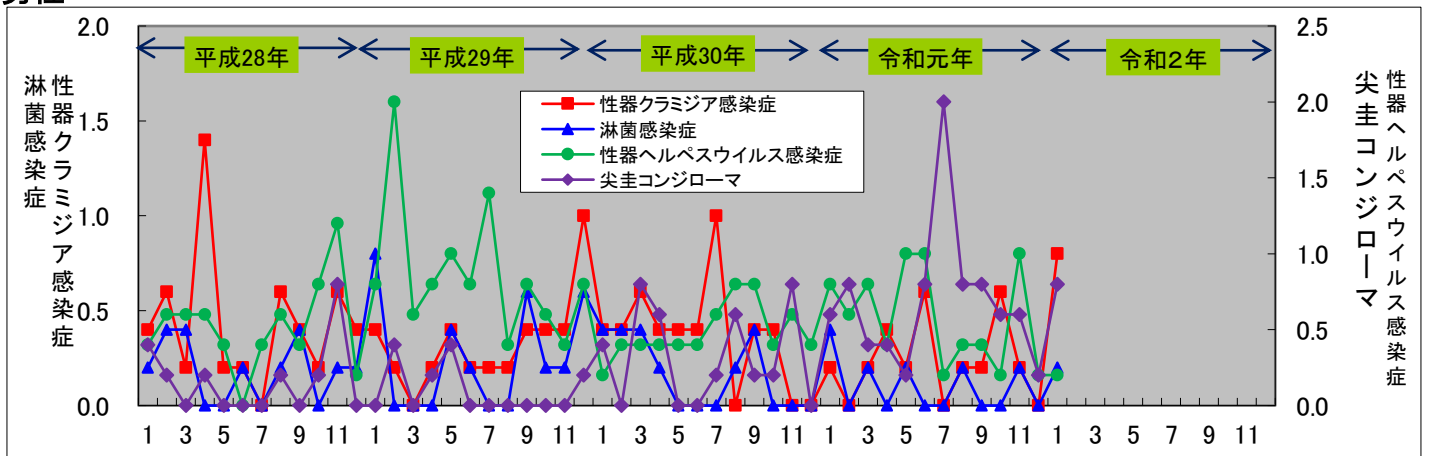


女性

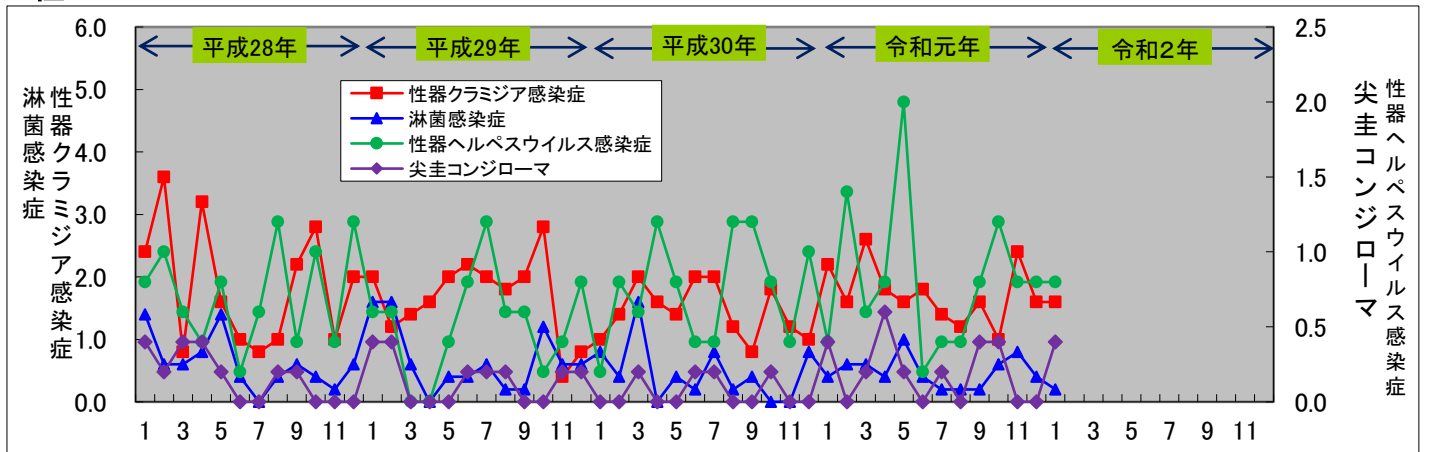


●全年齢層における性感染症の年別・月別の推移

男性



女性

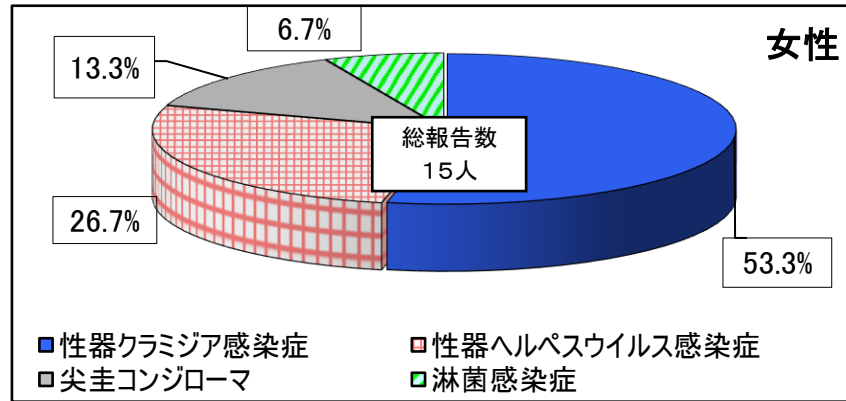
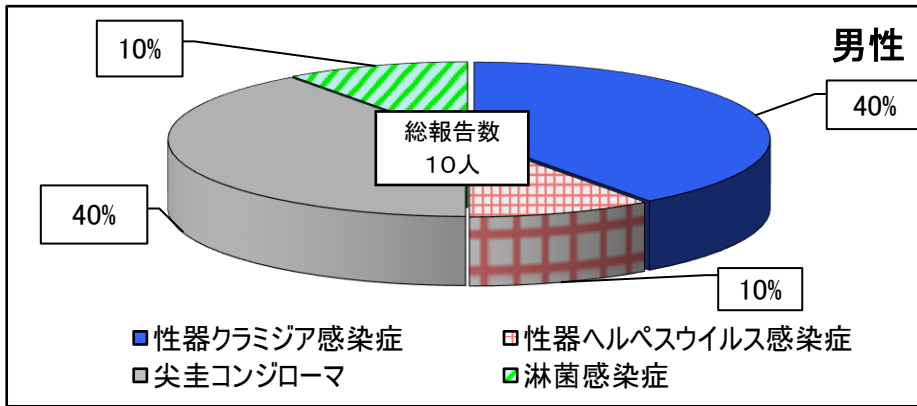


● 各疾病の報告状況

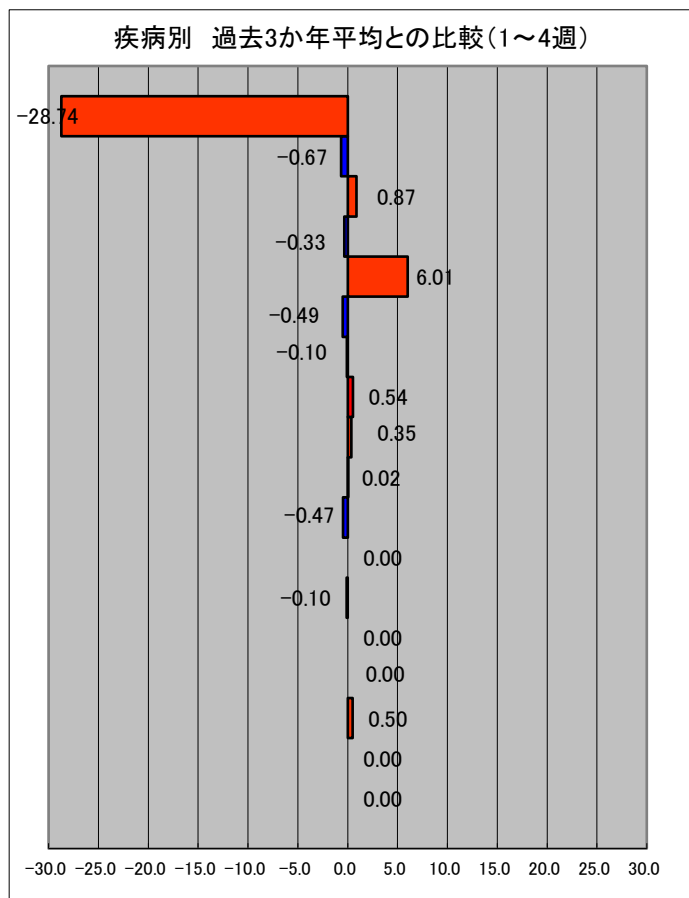
定点種別	前月比	疾患名	今月 (令和2年 1 月)				前月 (令和元年 12 月)				令和2年累計 男女合計 (報告数累計)				
			男女合計		男		女		男女合計			男		女	
			報告数	定点当たり	報告数	定点当たり	報告数	定点当たり	報告数	定点当たり		報告数	定点当たり	報告数	定点当たり
STD	△	性器クラミジア感染症	12	2.40	4	0.80	8	1.60	8	1.60	0	0.00	8	1.60	12
	=	性器ヘルペスウイルス感染症	5	1.00	1	0.20	4	0.80	5	1.00	1	0.20	4	0.80	5
	△	尖圭コンジローマ	6	1.20	4	0.80	2	0.40	1	0.20	1	0.20	0	0.00	6
	=	淋菌感染症	2	0.40	1	0.20	1	0.20	2	0.40	0	0.00	2	0.40	2
計 (前月比)			25 (+9)		10 (+8)		15 (+1)		16		2		14	25	
基幹	=	メチシリン耐性黄色ブドウ球菌感染症	5	5.00	3	3.00	2	2.00	5	5.00	5	5.00	0	0.00	5
	=	ペニシリン耐性肺炎球菌感染症	0	0.00	0	0.00	0	0.00	0	0.00	0	0.00	0	0.00	0
	=	薬剤耐性緑膿菌感染症	0	0.00	0	0.00	0	0.00	0	0.00	0	0.00	0	0.00	0
計 (前月比)			5		3 (-2)		2 (+2)		5		5		0	5	

※「前月比」欄において、「△」は報告数の男女合計が前月比増加、「＝」は横ばい、「▼」は減少を示す。

性感染症の発生割合(1月)



令和2年1月(1~4週) インフルエンザ・小児科・眼科定点疾病の発生状況について



1~4週 1医療機関
平均患者報告数

インフルエンザ	17.87
RSウイルス感染症	0.23
咽頭結膜熱	2.12
A群溶血性レンサ球菌咽頭炎	3.79
感染性胃腸炎	15.90
水痘(水ぼうそう)	0.69
手足口病	0.71
伝染性紅斑	0.77
突発性発疹	0.81
ヘルパンギーナ	0.08
流行性耳下腺炎(おたふくかぜ)	0.15
急性出血性結膜炎	0.00
流行性角結膜炎	0.56
細菌性髄膜炎	0.00
無菌性髄膜炎	0.00
マイコプラズマ肺炎	0.50
クラミジア肺炎	0.00
感染性胃腸炎(ロタウイルス)	0.00

感染性胃腸炎が増加傾向にあり、過去3か年の1医療機関平均患者報告数と比較しても、6.01増となっております。

また、第49週からインフルエンザ定点医療機関あたりの報告数が注意報開始基準値(10.0以上)となっています。

減少傾向にはありますが、今後も咳エチケットなど、予防に努めましょう。

